

産学連携プロジェクトによる日本語学習 (2)

～越境的学習を引き起こす活動のデザイン～

神吉宇一 (武蔵野大学)

三代純平 (武蔵野美術大学)

米徳信一 (武蔵野美術大学)

本発表の目的と流れ

- カシオと武蔵美の産学連携の取り組みにおいて越境的な学習がどのようにデザインされたかを事例から検討することを目的とする
1. 本研究における学習観と越境的学習
 2. 実践概要（省略版）
 3. 本実践において越境学習を引き起こした学習活動のデザイン

本研究における学習観と越境的学習

越境的学習とは

- なにかに熟達する学習ではなく、ものの見方や自分自身のあり方が変わるプロセス（青山2015）
- 熟達をめざす垂直的学習に対して、越境による学習を水平的学習と言う（Engeström他1995）

境界の特徴

1. 境界変容：境界は固定的なものではなく実践の中で変容する。
2. 多重境界性：複数の境界があちこちで生まれ交差する。同じ境界に対しても立場や視点で異なる意味が付与される。
3. 境界の根源的矛盾：境界は問題をはらむが必要でもある。
4. 境界の構成と変容：境界は人間活動によって構成され人々の手によってつくり変えることができる。

(香川2015)

越境のタイプ

1. 学校から職場のような**時間的横断**
2. 仕事の目的を達成するために別の部署の関係者と連携するよ
うな**手段的横断**
3. 異質なものが混じり合い新たな実践や価値を創造する**ハイブリ
ダイゼーション**

(青山2015、香川2015)

实践概要

1. 本研究の概要：にっぽん多文化共生発信プロジェクト

学生と企業が多文化に関わるフィールドを取材することを通し、多文化共生へ向けた社会課題を学ぶ（三代・米徳 2021）

- 多様性を尊重する社会とはどのような社会なのかを自分たち自身に問うこと
- 取材を中心とすること
- 取材での発見を発信する場を持つこと



1. 本研究の概要：データ

- ・ 授業記録（学生のふりかえり、教師の記録、映像記録）
- ・ 本プロジェクトにおける教師の役割についてのふりかえり
（三代・米徳・神吉による座談会形式の文字化）

三代：日本語科目の担当者・日本語教育専門

米徳：米徳ゼミの担当者・ビジュアルコミュニケーションデザイン専門

神吉：参与観察・日本語教育専門

2. 実践の概要：プロジェクト参加者

上級日本語（担当者：三代）学生9名

米徳ゼミ（担当者：米徳）学生8名

カシオ：4名

取材協力者

イベント参加者

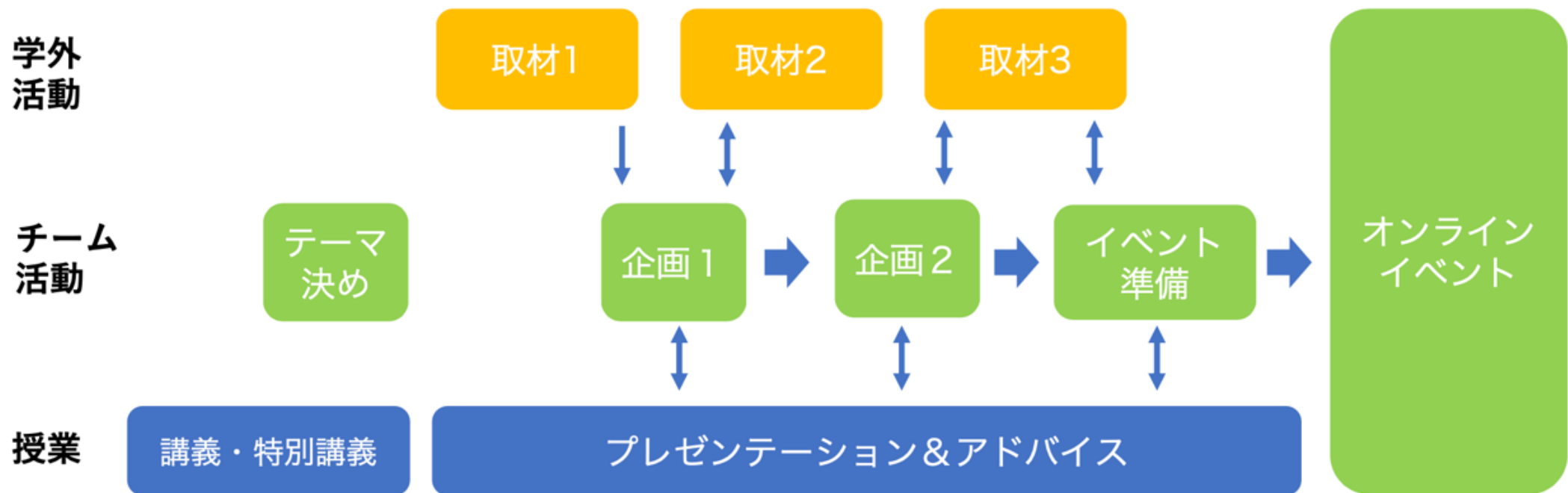
2. 実践の概要：プロジェクトの流れ

インクルージョンをテーマに、

取材し、イベントを開催するプロジェクト

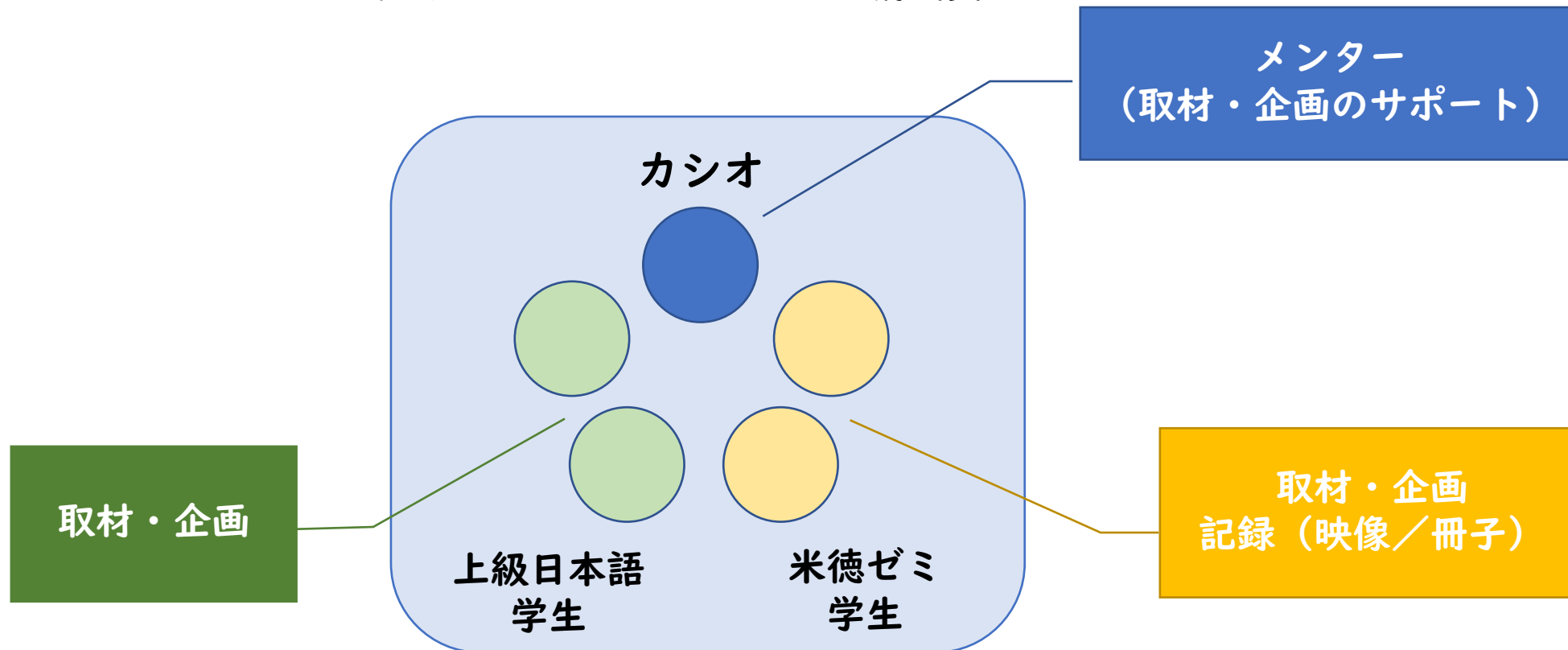
- (1) **ゲスト講師の講義**：インクルージョンやインクルーシブ・デザイン、取材
- (2) **取材**：4つのチームに分かれ、それぞれインクルーシブな活動に取り組む
団体を取材
- (3) **イベント準備**：取材を通じた発見を共有するためのイベントを企画
- (4) **イベント開催**

2. 実践の概要：プロジェクトの流れ



2. 実践の概要：プロジェクト参加者の役割

取材・イベント企画チームの構成員



越境学習に関する担当教員の意図

ポスト・コミュニカティブ・アプローチによる就職支援の課題

- 越境により異なる文化が会うことで既存の枠組みが揺さぶられ、そこに新しい価値が創造される可能性がある
- 留学生のもたらす新しい視点や価値観を受け止め、ともに新しい社会を創造するような土壌が今の日本社会に十分に備わっているとは言えない
- ハイブリダイゼーションによって「大学と企業が産学共同で新しい実践を作り出す中で、相互に水平的学習を経験」することが可能である
- 「批判的な一社会人」として（元）留学生が活躍できるための教育を目指す必要性がある

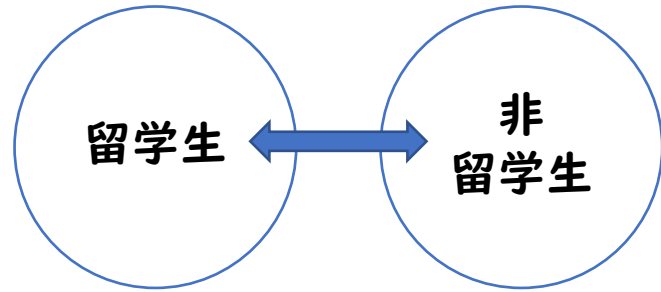
三代（2019）

もともと境界上にある履修学生たち

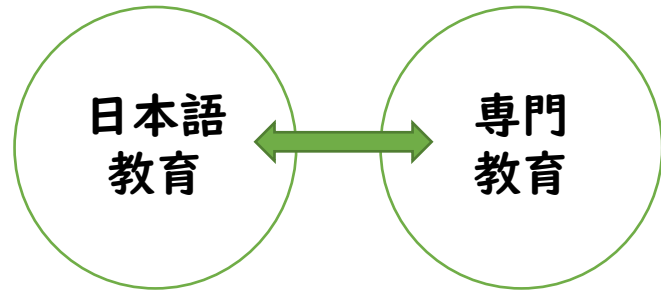
- 自分が、韓国と中国のハーフなので、小さいころから、結構中国語が悪くて、よく何か迷ったり
- 学科的にすごい何か、何をしてますって、こうはっきり言えないのが、まあいいところっちゃいいところ。（略）結構、2年生ぐらいまでは嫌だったんですけど。大学で何やってますって言える人がいいなと思って。

テーマの「インクルージョン」、「共修」というスタイルがこういう学生に響いた可能性はある

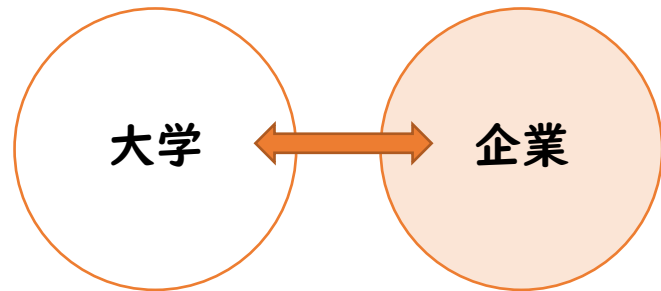
越境 (I) 「実践コミュニティ」形成



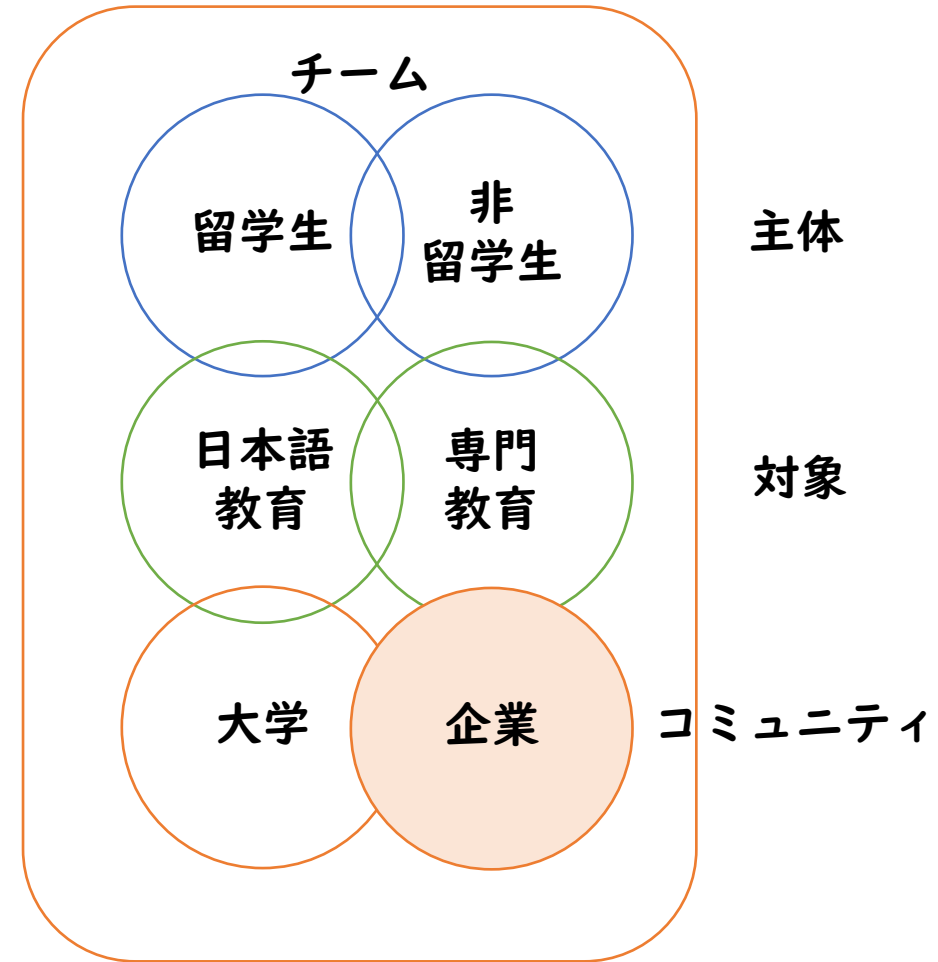
履修登録ルールの変更



専門の異なる教員の協働



産学連携

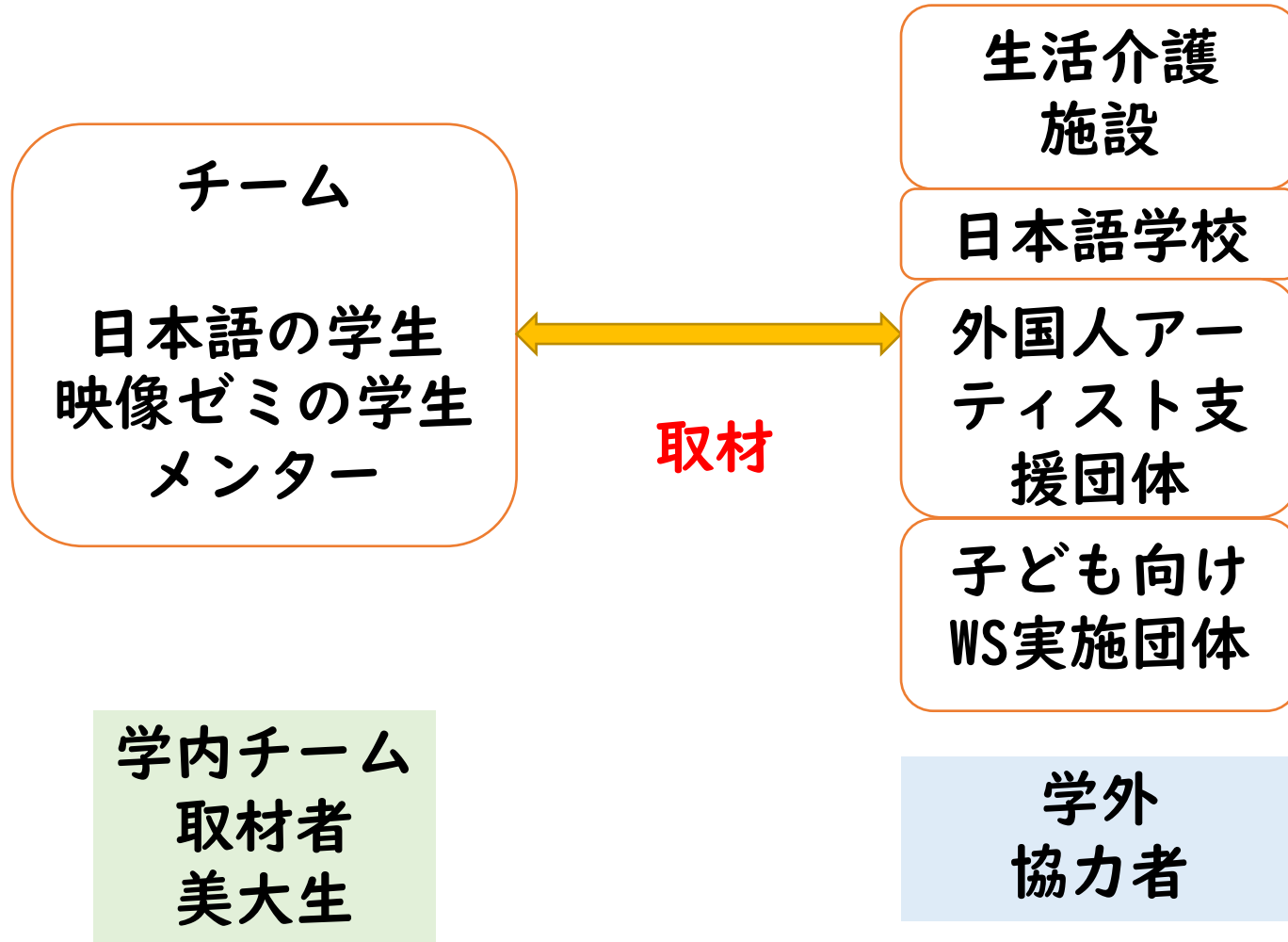


越境 (1) によって生じた学生の葛藤・変容

- 私たちは、**上級日本語の授業を履修しているわけではない**じゃないですか。なので、どこまで、サポートとして**いるべき、チームにいるべきなのか**、それとも本当に一緒に動かしていいの**かっていうのが分からなくて**。それ、**ゼミ内でも結構話して**、**どういう立ち位置で撮るみたいな話**はしたんですけど、**その話し合いで、何かだ**いぶもう、**本当、メンバーの一員として介入して進めちゃっていいんじゃない？**ってなって。で、**チームに結構入りながらやったことで、ただその外から撮ってるだけ**じゃなくて、**中側から撮ることで、みんなの自然な表情とか、そういうのを撮れたし**
- 「**撮影してんのに参加しなきゃいけない、どうするの？**」みたいな、**そのもう難しさ**がすごいあって、**参加しなきゃいけないけどいい絵を撮らなきゃ、でも参加し**なきゃ**っていう、しかも映らないっていうルール**だったんで。カメラ外で「**どうですか？**」みたいな**感じで映らない**。「**どこまで行ってますか？**」みたいな**にでも意見は**言う**みたいな、それが大変でした**ね。米徳ゼミで**すごい話し合**って、**そこを**

越境 (1) の葛藤は主に米徳ゼミ生、日本語履修学生はもともと「日本語」と「専門」の越境を前提としていたためか

越境 (2) 「取材」による境界変容 (学内と学外)



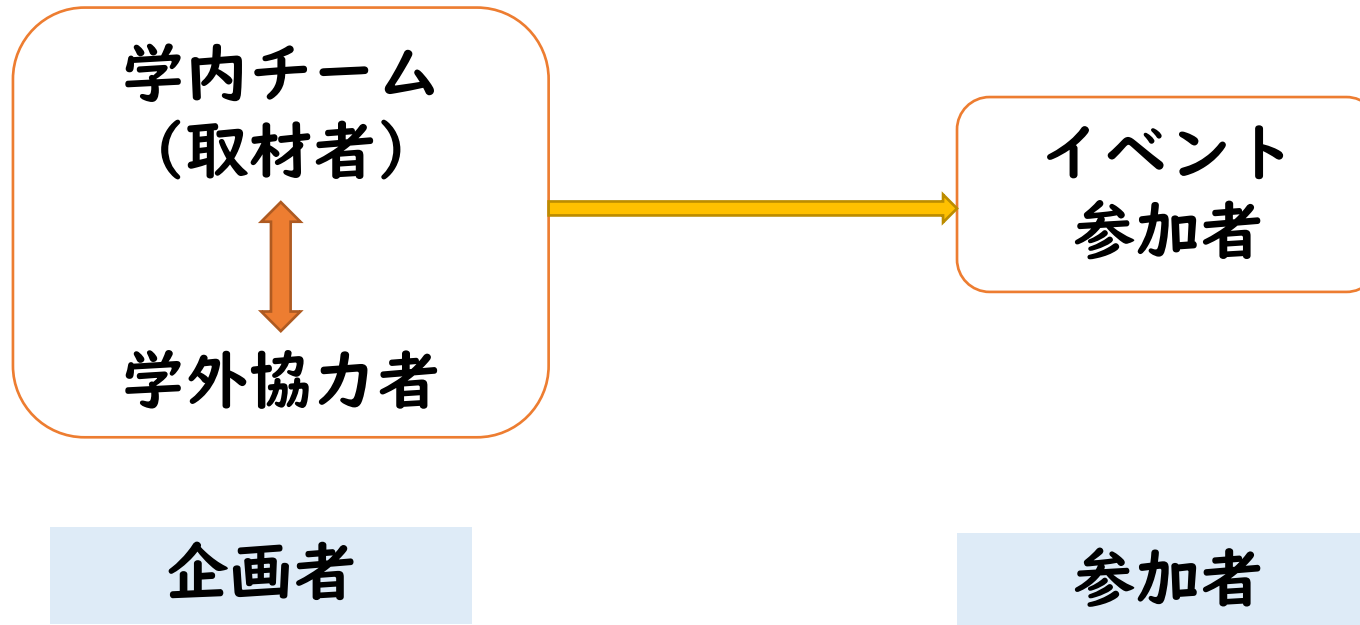
越境（2）によって生じた学生の葛藤・変容

- 最初はやっぱり私たちも美大生っていうこともあって、すごいやっぱりアートとかアトリエに注目したんですけど、何かそうすると、何かその、それこそ話し合いの途中で出た意見として、何かアートだからインクルーシブだよねみたいな。アートだからみたいな。アートが理由っていうか、何か、そういうことじゃないんじゃない？ってなったんですよ。何かその、まあアートに注目することも、決して悪いことではないし、アート自体、すごくいいことなので、それは悪いことじゃないんですけど、それはちょっとアートの押し付けみたいな。アートを理由に、インクルーシブを言ってるだけになっちゃうんじゃないか。それって本当に私たちが伝えたいことなのかなっていう話になって。で、そこでちょっと、でもじゃあどうしたらいいんだろうっていうのが分からなくて

「美大」「美大生」という境界内で考えていた価値が、取材で話を聞くうちに変容していった、伝える（＝表現する）目的と内容や方法について、わからなくなっていく様子、越境によってunlearnが行われている

越境 (3) 「イベント」による境界変容 (企画者と参加者)

イベント企画・実施



越境 (3) によって生じた主体の葛藤・変容

- 私も今こうやって振り返ってみると、Aさんが言っていた、Nさんに送るメール、文面がちょっと違うよねということになって、そこからまたちょっと話し合いを始めたというのか一番印象的というか、すごく大変だったなと思うことで。それまでは結構テーマについて何となく分かっていたような気にはなっていたけど、ちゃんと深掘りしてみると、全然みんなが共通した意識みたいなものもそれまではなかったと思うし、まだ曖昧なところとかもあったと思うので、テーマを決めるという部分は、確かにちょっといろいろ難しかったなと思います。
- 私の受け取る力も、それを言語化する力も足りていなくて。文面を考える直前まで4人で話し合っ、このテーマはこういうことだよね、みたいな確認はしたんですけど、それを私がうまく飲み込めていない状態で文面を書いたら、それが4人で話し合っ決めてことや、今まで取材してきたこととは、ずれた方向性になっていたというのが原因かなと。

イベント企画のために理念、概念等を明確に言語化し協力者と調整していく必要があった、学生+メンターのチームに協力者という新たなメンバーが加わることで境界が変容、自分たちのことばでの説明と共有に必要性に気づく

意図されていなかった越境

- 何か僕はこういう、あの協力者さんの見学、あの会社の見学とか行ったときは、親でも子どもでもなく何か学生として何か研究資料を見てる感じ。いわゆる第三者みたいな感じで、何か大人と子どもを見てたんですけど。何か僕、ファシリテーターを体験者として、あのワークショップに参加させていただいたときに初めて大人としての立場の経験を味わったような気がして。やっぱり、その協力者の方と一緒に同じ役割で参加したので。僕はまだ学生で、とてもじゃないけど大人とは言い切れないんですけど、子どもたちにとってはやっぱり僕も大人に見えるのかなと思って。何か、そのときに何か初めて、のめり込めたというか。大人としてどうなんだろうとか、子どもの視点はどうなんだろうとか
- 何か大人は子どもに何か与えなきゃいけないという認識でしたね。ファシリテーター、ワークショップ体験して、大人が子どもに学ぶこともあるとか、何か子どもたちと触れ合って、何だろうな、こういう、何だろうな。そうですね。気づかされることがあったというのが大きいというか

当初は想定されていなかった越境、取材のはずがファシリテーターとして関わることになった、そのことが視点を大きく変容させた（外部の取材者、当事者としてのファシリテーター）

まとめ

- 重層的にデザインされた活動によって学生たちに境界が可視化しやすくなっていた
- 複数の境界変容を意図的に設定することが学生たちの葛藤を引き起こし、そのことが「これでいいのかな」とか「どうしたらいいんだろう」という問いになり、深い学びにつながる
- 越境する、自分のいるところから踏み出してみるということが意識変容につながり、それがその後の学生たちの行動変容にもつながっている

- 前は障害を持つ方があまりまわりになかったので、どうやって接したらいいとか、やっぱりちょっと、たぶん私、**区別しちゃってる気持ちとかがあった**と思うんですけど、たぶんそれが、その**枠組みが外れた**のかな。知ることで、何か、それこそ何か、**分けて考えるんじゃないくて、一つの大きな社会のかたまりとして考えられるようになったのかなって**いうのが**大きい自分の成長**かなって思っています。私が、今ちょっとバイトでカフェで働いてるんですけど、そこに障害を持っている方がお客さんで、車いすのお客さんで、いらっしゃってて。今までは、ちょっとどうやって接したらいいか分かんなくて、そんなに深く関わらなかつたんですよ。普通にメニューを持って、普通にお出ししてっていう、まあ接客はするんですけど、何か積極的に話しかけに**いっていいのかとか分かんなくて、深く関われなかつた**んですけど、**この取材を通して、話しかけに行くように**して見て、今は結構仲よく、何か来たら、はい、何か向こうも私の名前と顔を覚えてくださって、私も、はい、結構仲よくしています。

- 前は、簡単な言葉で話したほうがいいのかとか、何か全部助けたほうがいいのかとか、いろいろ考えちゃって、逆に何か、**どうやって接したらいいか分かんなくて、距離を取っちゃつた**んですけど、そうじゃなくて、普通のお客さんと同じように接して、普通に話して、そうすると向こうも普通に応えてくれるから、ああ、**そういうのが今までできてなかつたんだ**と思って

参考文献

- 青山征彦（2015）「越境と活動理論のことはじめ」香川秀太・青山征彦編『越境する対話と学び：異質な人・組織・コミュニティをつなぐ』新曜社、19-33.
- 香川秀太（2015）「『越境的な対話と学び』とは何か：プロセス、実践方法、理論」香川秀太・青山征彦編『越境する対話と学び：異質な人・組織・コミュニティをつなぐ』新曜社、35-64.
- 三代純平（2019）「越境を支えるビジネス日本語教育」佐藤慎司編『コミュニケーションとは何か：ポスト・コミュニカティブ・アプローチ』くろしお出版、175-202.
- 三代純平・米徳信一（2021）『産学連携でつくる多文化共生—カシオとムサビがデザインする日本語教育』くろしお出版
- Engeström, Y., Engeström, R., & Kärkkäinen, M. (1995) Polycontextuality and boundary crossing in expert cognition: Learning and problem solving in complex work activity. *Learning and Instruction*, 5, 313-336.

*本研究は、科研費21K00632の助成を受けている